年　組　番号(　　)　名前

「蔵のまち」象徴 れんがピンチ

唯一の登り窯 9年生産なし

継承へ地元の需要が鍵

煙突や喫茶店に蔵座敷―。「蔵のまち」として知られる喜多方市は、100棟を超えるれんが造りの建物が並ぶ隠れた「れんがのまち」でもある。全て市内の近代化産業遺産「三津谷の登り窯」で生産されており、関係者によると、稼働できるれんが用の登り窯は国内唯一。しかし、需要は失われ、最後の焼成から約9年が経過した。伝統のれんが作りが存続の危機を迎えている。

窯やれんがの継承に取り組む加藤さん。「魅力を知ってほしい」と期待する

登り窯は喜多方市の中心部から北東に約4キロの田園地帯にある。一度で約1万個のれんがが生産可能で、有志でつくる喜多方煉瓦会が窯の保存や焼成に取り組んでいる。喜多方のれんがは厳しい寒さかられんがの割れを防ぐために上薬を塗り、それが溶けて独特の赤褐色を生むのが特徴だ。工業用窯より高温な分、密度が高く地震にも強い仕上がりになるという。

登り窯は樋口窯業という会社が1890年に瓦用として開業後、れんがとの共同窯として改築。小学校の校舎にれんがが使われたことで注目され、市内のれんが蔵の需要を支えた。しかし、大量生産が好まれる昭和に入ると手間のかかる登り窯のれんがは需要を失い、一度は廃業に追い込まれた。

転機は2007年。登り窯やれんがが造りの建物が近代化産業遺産に登録されたのを機に保存活用プロジェクトを始動し、久しぶりに焼成されたれんがは市役所の新庁舎などに使われた。その後は有志で煉瓦会をつくり、営利目的ではなく協力金を得る形でれんがの生産体制を敷く。ただ、需要は続かず16年の焼成を最後に、活動は窯の見学の受け入れが主となっている。

少量生産できず

窯の特徴から少量生産ができず、最低でも5千～6千個の注文がないと焼成できない。大口注文の見込みはなく、壁の修復や花壇用など小口注文を在庫からさばいている状況という。

焼成されないことで問題となるのが、技術の継承だ。「焼いて覚えるしかない」という同会の加藤裕之事業統括(58)によると、気温や湿度、まきの水分量など細かい条件で、焼く時間や窯の温度は大きく変わる。17人いる会員の高齢化も進み、焼成できる人がいなくなる可能性がある。知名度も課題で、市内で最初に建てられたれんが蔵を所有する「若喜商店」の冠木紳一郎社長(69)は「喜多方にれんがのイメージを持つ人は地元でも少ないのでは」と話す。

加藤さんは、地元から需要が広がっていくことが継承の鍵を握るとし、行政への働きかけのほか、窯の見学などで喜多方のれんがの魅力を伝えようとしている。「喜多方れんがの魅力を知り、市内から大口注文が広がっていくことを願う。伝統を残さないといけない」と切実に語る。

（三沢誠）

Q 三津谷の登り窯　10個の窯が仕切りで区切られ、斜面上に並ぶ。下段の対流熱を利用して上段を温め焼成する。全て手作業で、三日三晩、交代でまきを補充し続ける。窯は予約制で見学できる。問い合わせは喜多方煉瓦会（電話0241・23・5004）へ。

登り窯で焼いたれんが。上薬が溶け、独特の赤褐色に仕上がる

▲ 5月6日 福島民友新聞掲載

記事から知り得たこと

疑問に思ったこと、調べてみたいこと

調べてわかったこと、考えたこと（330字程度）

伝統の産業や技術を受け継いでいくことはどんな意味があると考えますか。

福島民友投稿のページ「窓」に送る